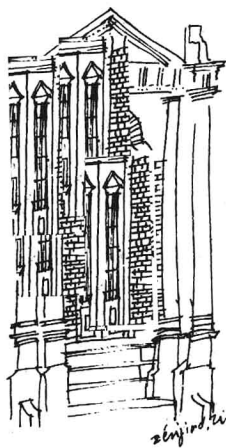




木好子 の内八号館

講談社版



丸の内八号館

昭和三十九年三月二十日発行

著者 芝木好子

発行者 野間省一

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 横田製本株式会社

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町三の一九

電話 東京(九四二)一一一一大代表

振替 東京三九三〇

定価 三七〇円

著者の了解により検印廃止

© 1964 Yosiko Sibaki

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

目次

第一章 丸の内八号館

7

第二章 華燭

115

第三章 今生

145

丸の内八号館

第一章

丸の内八号館

朝の整頓された静かな研究室に、めずらしく弾んだ空気が流れていた。資料部は机の配置を変えて、新しく入ってくる三人の所員のために受入れの準備を調べていた。いつもより人の出入りがあつて、なんとなく視線が新しい机のあたりへそそがれてゆく。今日は四月朔日であつた。

恭子は窓際の椅子から外を眺めて、春の陽射をあびた向いの赤煉瓦の建物の角へ眼をやつていた。もうすぐ新しい人間がやってくる。毎年のことながら、新入所員を迎える日はなにほどこかの期待があつた。ひろい丸の内のオフィス街で、この研究所へくるといふのは、やはり機縁といわなければなるまい。受付へ見にいった峰岸あい子が戻ってきながら、小さく手を振った。「まだ来ていない」ようだった。

五城経済研究所は馬場先門横の電車通りに面していた。丸の内から馬場先門にかけてのビルディング街は、古風な煉瓦館がつづいて、研究所もその一つであつた。明治時代、ロンド

ンのロンバート街にならって造られたものだそうで、人が一町ロンドンとよぶのを恭子はおもしろいと思っていた。煉瓦館はほとんど三階建て、その一つ一つに番号が附され、五城経済研究所は八号館であった。煉瓦の肌は長い月日に風化して茶褐色になってしまったし、堅牢な目よりも古びていたが、街路樹の大銀杏との調和は申分なかった。

煉瓦館は冷たい壁に囲まれて窓が小さい。そのせいで昼も仄暗いのだが、気分は落着いた。二階の窓際のやや明るい場所に、よく光ったレミントンとアンダーウッドの二台のタイプライターを並べたところが高津恭子の席で、そのうしろの窓のところに邦文タイプの特等席といふ子がいる。研究所の人たちはここを特等席といった。所長が趣味で翻訳している独逸古典の「鉄砲史」を、コッピイしたり、清書したりするために、恭子は傍のデスクに向うこともあった。

所長は直き直きに人を呼びつけることはなかった。先ず主事に用を命じ、主事はそれを各部の主任に伝え、主任はそれぞれの部下に言いつけた。そういう順序を弁えなければならぬ形式張ったものが、研究所を支配していた。ところがどうした風の吹きまわしか、近頃になって所長のお召しが直かに恭子へくることがあった。彼女はこの特例に驚いて、緊張しながら立っていった。彼女に限らない、ごくたまに資料部主任がお召しにあらうと、小心な彼女は椅子から飛び上り、上着のちりを払い、薄い髪に手をやりながら、あたふたと出ていった。彼がそうするのも無理はないので、日頃呼ばれつけている二人の主事すら同様であった。実

質的に研究所の仕事を支配しているB主事からして、所長に名を呼ばれるや、

「はいい！」

と反射的に出るらしい幼児のような声を發して、ランニングの姿勢で小走りに所長室へ伺候した。ひそかに笑うゆとりもないほど、所長の声音は威圧的に響いた。

この朝、恭子が所長室へよばれたのは偶然であつた。彼女は真新しい純白のセーターを着てきてよかつたと思つた。所長は顔もからだも並外れて大きな人で、威厳のある、古武士というよりは殿様めいた風格の老人であつた。物をいうとき顔を振る癖があつて、首から上がゆらゆらした。恭子は固くなっている時も、首振りが氣になつてならなかつた。所長は彼女にぎっしり詰つた独逸ヒゲ文字の原書を、行をあけてタイプさせた。その行間に自分の翻訳を書きこんでゆくのだ。次にそれを別紙へ清書させた。彼の翻訳は道楽なので遅々としていたが、一区切して目を通す時は満足氣で、なんとも言えないものがある。時にその厚い唇から感嘆詞が洩れたりする。恭子は今日もそばで眼を伏せながら、早くすむよう待つた。

扉がノックされ、A主事が現れた。所長の新入所員を引見する時間になつていた。A主事のあとから新顔の三人の青年が入つてきて一列に並ぶと、彼等は行儀よく挨拶した。中肉中背の、髪の毛ぢれた男が名を名乗ると、「ユサ・タモチ」と聞えた。彼は遊佐保であつた。

その隣りの背の高い、色白な青年は、逆に都会人らしい齒切れのよい明快さで小野田千元と告げた。もう一人の小肥りのした、おだやかな風貌の青年は勢近雄と言つた。彼等の挨拶が

すむと、所長は気難しい表情のまま、背後の壁に掲げられた額を見返って、その人物が誰か知っているかと訊ねた。それは五城財閥の五城太久己社長の堂々と貫禄のある、眼光鋭い風貌の写真像であった。

「君たちは今日からこの社長をいただいて、日本を背負う五城の一員である」

所長は言った。彼自身が入社した時、それはまだ小さな会社すぎなかった。その後日本の資本主義の発達とともに歩いた五城財閥の発展を、所長は我がことのように長々と語りだした。今やすべての社員は五城のマークを誇りとするようになった。五城経済研究所は五城財閥全体の発展のために役立つ研究機関でなければならない、と所長は訓辞を与えた。彼は重たいからだを起して立上ると、額に向って威儀を正し、両手を大きく開いて拍手を打った。五城経済研究所の名物である所長の礼拝につれて、三人の青年は気を吞まれたように敬礼した。この行事がすむと、所長はようやく新入所員を放免した。

先刻から恭子はそこに控えて、思いがけない立会をさせられていたが、所長は忘れていたわけではなかった。彼は自分の趣味のたのしみをあとに残しておいたのだった。翻訳と原文とを再び丹念に照合したあと、

「御苦労」

と言った。恭子はこの犒いによつて、所長室を退去した。人間はこんな年齢になつても愉しみがあるのだな、所長の顔に微笑がただようのを、いつも不思議なことに思わずにい

られない。彼女が廊下へ出て最初にしたのは、両手を開いて、肩をほぐすことだった。なぜ所長にこれほど権威があるのか、恭子は考えてみたこともなかった。人々が懼れるから自分も懼れた。調査部と資料部とは横につづいて、その間に応接室がはさまっている。その前は受付であった。広い調査部では、A主事に伴われた三人の青年がデスク毎に挨拶してまわっていた。恭子は奥の資料部へ歩いてゆきながら、三年前の自分を思いだした。就職難の関門を突破して入所した第一日は自分にもあった。あのとき二人の青年がいっしょだったが、今は二人とも兵役にとられてしまつて、ここにはいない。翌年もその次の年も新入所員は入つてきたが、その年の終りには例外なく軍隊へとられていった。僅か五十人の研究所で、その補充が際限なく繰返されるのだ。たまに除隊になった者も、一年を待たずに召集がきて満洲や北支へつれてゆかれた。日支事変の拡大してゆく昭和十四年は、あわただしかった。

資料部の一方の奥は三万冊の貴重な書物が整然と並ぶ書庫であった。東京で一二の優れた専門資料を持つ宝庫で、それらの書物を出し入れする資料係りの四人の中年婦人のほか、若い娘といえは恭子と、邦文タイプを打つ峰岸あい子の二人しかいない。

「もうじき挨拶にくるわよ」

恭子はうしろの席のあい子へ耳打した。あい子にはこりとして、自分の打ちかけの紙をあごで示した。三人の青年の履歴控えがそこにあった。

「一中、一高、T大経済学部卒、小野田千元、すごい秀才ね」

「うちの研究所におきましては、T大経済の十番以内しか採らない方針であります」

あい子は得意そうにそう言った。調査部の誰それは一番だったということとは、頭髮の薄らぐまで本人についてまわるだろう。彼が無能だったらどうなるのか。だが研究所は単調で、昔から瑣末な変化もよろこばない。レットルを重んじるかたわら、目立つことは禁物であった。個人の名前で論文を発表するのも難かしかったし、目立った意見を述べたり、講演に出たりするにも制約があった。大学の講師を兼ねた者はその講義に注意をうけた。誰も彼も温順でなければならなかった。毎月発行する機関誌は邦文と英文の二つだが、署名は一切なされなかった。研究員は研究所の機構のなかの一員にすぎない。女子も例外ではなかった。ある時、恭子に婦人雑誌からグラビヤ写真の依頼があった。卒業した学院の紹介によるものであった。彼女は編集者と打合せて、翌日の昼休みにそれを撮る約束をした。主任に了解を求めるほどのこととも思わなかった。誰かが小耳にはさんで注進したとみえ、主任はA主事に告げにゆき、A主事は直ちに数名の幹部を集めて会議を開いた。婦人雑誌のグラビヤはそれまで知名人の子女に限られていたから、その仲間になるのは若い恭子にはたいそううれしいことだったが、高々写真一枚がそれほどの問題になろうとは意外だった。恭子はA主事に呼ばれ、その説論におどろきながら、

「研究所の名前は出さないつもりでした」

と釈明した。

「たとえ研究所の名が伏されても、たてして解るものです」

A 主事は大切な大切な研究所に、どんな意味の評判が立つのも好まなかった。

「すみませんでした」

と恭子はお辞儀をした。あやまること以外上司への言葉はなかった。事なかれ主義の A 主事に対して反発する思いで、彼女は八つ当りにタイプをあげしく打った。そうした荒々しい感情の波立ちも、単調な生活を繰返していると、次第に薄れてしまうのだが、恭子は三年勤めて二十三歳になった今も、峰岸あい子ほど環境に同化は出来ない。むしろ変化を好まない環境であればあるほど、心の奥にそれを渴望するものがあつた。

A 主事につれられて真新しい背広姿の三人の青年が資料部へ入ってきた。部屋の入口は閲覧室を兼ねて、カウンターで仕切られている。窓際の恭子は、入ってくる人間と最初に顔が合った。頬のゆるんだ初老の A 主事と対照的に初々しい青年たちが、いくらか照れたように、なかば取澄して入ってきた。ふいに恭子は自分の周囲へスポットを当てられた明るさを感じた。若い娘たちがつれだってくるとあたりが華やぐように、若い男が群れてきた時、恭子は自分が熱っぽい活気につつまれるのを感じた。彼等は資料部の十二三人の机をまわって挨拶しはじめた。青年たちと恭子とは、すでにお互いの顔を見知っていた。彼等はこの女気の乏しい研究所で見出した若い娘に、好奇の眼を向けた。恭子は逆に吟味の眼差をそそいでやった。ここでは彼女の方が先輩なのだ。

「この人達とも一年か」彼女は毎年若い男が入ってくる度に、皮膚の美しくなる自分を意識しながら、心に苦汁にがりのような舌ざわりを残した。去年入った青年も、一年を待たずに兵隊にとられた。恭子はその青年から黄布表紙の梶井基次郎の限定版をもらったが、その本には文字が書いてなかった。ただ、「あげます」と言っただけであつた。それだけのかかわりで、行つてしまふ。

三人の青年は挨拶がすむと、資料部の新しい机に並んでかけた。今日から当分の間彼等はここにいて、やがて調査部のどこかに配属される。彼等の席が決ると、もうどことなく若やいだざわめきが立つた。研究所がおのずとゆるす変化の一つであつた。

大学の教室とはまるで違う場所に坐つた彼等は、神妙にしている。研究所は勉強するとこゝろと期待している彼等も、そのうち閉された石壁の中で窒息するだろう、と恭子は思った。仕事は自分の意志とは無関係にすすめられ、対人関係は複雑に絡んでくるものだ。恭子は自分の仕事に飽きていた。一分間何十ワードのスピードを出したところで、それは単に機械をマスターしたにすぎない。もっといろんな面白いことが自分の生活に充ちてくる必要があるのに、来る日も来る日も単調であつた。恭子は時に、人の度胆をぬくような真紅の服を着るか、髪をぶつくり切つて、唇を塗りたくつてみようかと考える。ある時彼女はびっくり玩具を買つてきて、昼休みにタイプライターのわきへ置いた。すると来合せた調査部員も、日頃ものに動じない会計主任も、